

ハッピー
デス
アリンデの日記／他

23

世界大文字全集

(23)

河出書房



世界文学全集

23

ハーディ

テス

アリシアの日記/他

石川欣一・河野一郎訳

河出書房

© 1969

カラー版 世界文学全集 第 23 巻

ハーディ テス アリシアの日記 他

昭和 42 年 4 月 20 日初版発行

昭和 44 年 7 月 1 日再版発行

訳 者 石川 欣 一
河 野 一 郎

装幀者 亀 倉 雄 策

発行者 中 島 隆 之

印刷者 澤 村 嘉 一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 750 円

製 本・和田製本工業株式会社
製 函・中田製函株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町 3 の 6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目次

ハーディ

テ	ス		3
第一部	おとめ		7
第二部	おとめの日は過ぎて		54
第三部	再起		72
第四部	結果		107
	お祈り		113
第五部	女はつぐなう		158
第六部	改心者		211
第七部	成就		254
アリシアの日記		277	
呪われた腕		305	
憂鬱な軽騎兵		329	
妻ゆえに		345	
幻想を追う女		361	
年表		381	
解説		393	

巻頭口絵 ハーディ肖像

(ナショナル・ポートレート・ギャラリー所蔵)

ウィリアム・W・ウーレス画 (1922)

本文カラーさし絵

デヴィッド・K・ストーン

© 1967 David K. Stone

装 幀 亀倉雄策

テ ス

——純潔な女——

石川
欣一
訳

忠実に物語る者
トマス・ハーディ

主要人物

テス（愛称テッシー） 本編の女主人公。サウス・ウェセックスの片田舎で育った純情無垢な乙女。その美貌があだとなり、苦難の人生を送り、ついに殺人の罪をおかす。

アレック（アレキサンダア） に、ぜのダーバウィル家の一人息子。テスの処女性を奪う放蕩無頼の青年。最後にテスのために殺される。

エンジェル・クレア 厳格な牧師の家に育った情熱的な青年。テスと結婚する。近代思想の影響をうけ、聖職につくことをきらって、農場生活にはいる。

ジョン（ダービーフィールド） テスの父親。行商で一家を支えているが、酒飲みの怠け者。

ジョーン テスの母親。子だくさんになやむ無教育な女。

ライザハルル テスの妹。テスに似て美しい娘。

クレア師 牧師、エンジェルの父。

マリアン、レットイ、イッズ・ヒュエット タルボセイズ酪農場以来のテスの友達。いずれもエンジェルを恋していた娘たち。

グロービー フリントコム・アッシュ農場の主人。

”……哀れに傷つける名よ、わが胸は
寝床として汝を宿らしめん”

W・シェイクスピア

第 1 部

おとめ

I

五月下旬のある夕方、中年配の男がシャストンから、隣りあったブレイクモア——ブラックムーアとも呼ばれる——の谷にあるマールロツト村へと、家路をたどっていた。男の両足はぐらぐらして、歩き方には癖があり、とかく直線から左へそれるのだった。とくになにを考えていたのでもないが、なにかの意見を確認するかのように、ときどき強くうなずいた。からの鶏卵かごを片腕にぶら下げており、帽子は、けがしがわくちゃになって、ぬぐとき親指のつかむところがまったくすり切れていた。まもなく向こうから、かなり年とった牧師が、灰色の牝馬にまたがり、とりとめのない曲をうなりながらやって来るのに出くわした。

「今晚は」と、かごを持っている男がいった。

「今晚は、サー・ジョン」と、牧師がいった。

歩いている男は一、二歩行ってから立ち止まり、ふりかえった。

「ねえ、だんな、失礼ですがこの前の市の日、ちょうどいま時刻この道で出くわしておれが『お休み』というところ、だんなは今みたいに、『お休みサー・ジョン』と返事をなさった」

「そのとおり」と牧師がいった。

「それから、その前にもう一度——ひと月近く前に」

「いったかもしれない」

「するてつと、おれがつまらない行商人の、ただのジャック・ダービーフィールドなのに、あの時もこの時も、『サー・ジョン』と呼びなされるのは、いったいどういうわけなのですか？」

牧師は馬を一步二歩近づけた。

「ほんの気まぐれさ」と、牧師はいったが、ちょっとためらってからまた、「じつは、新しいこの郡の歴史を書くために系図類を調べあげていて、ちょっと前、ある発見をしたものでね。わたしはスタッグフット・レインに住む考古学者のトリンガム牧師なのだ。ダービーフィールド、きみは自分が、古い騎士の家柄ダーバヴィル家の、直系の子孫だということを、ほんとうに知らないのか。バトル寺院の古文書によれば、この一家は、征服王ウィリアムに従ってノルマンディから渡来したあの有名な騎士、サー・ベイガン・ダーバヴィルに源を発しているのだ」

「聞いたこともねえよ、だんな！」

「いや、ほんとうなんだ。ちょっと顎を上げてくれないか、横顔をもつとよく見たいから。うん、いささか品位が落ちてはいるが、まさしくダーバヴィルの鼻と顎だ。きみの先祖は、エストレマヴィラ卿がノルマンディでグラモーガンシャを征服したのを助けた、十二名の騎士のひとりなのだ。君の家族の分家は、英国のこの地方いたる所に、莊園をもっていた。その家々の名は、ステイーヴン王時代の国庫年譜に、のっている。ジョン王の治世の時、分家のひとりとは莊園を、十字

軍救護騎士団に寄付したくらい裕福だったし、エドワード二世のころ、きみの先祖ブライアンは、大評定につらなるためウェストミンスターに招かれた。きみの一家はオリヴァ・クロムウェルの時代、すこしおとろえたが、たいしたこととはなく、チャールズ二世の代になると、忠義のゆえをもって柏かしの木の騎士（この王、一六五一年ウスターの戦いに敗れ、柏の木陰にかくれて助かった）に任命された。そう、きみの一家には何代ものサー・ジョンがいたわけでも、もし騎士ナイトの称号が男爵の称号とおなじように世襲だったら——事実むかしは父が騎士なら子も騎士になったものだが——きみはいまサー・ジョンということになる」

「とんでもない！」

「要するに」と、牧師は鞭むちで自分の足をいきおいよくたたきながら結論した——「英国じゅうにこんなふうな家族は、ほとんどいない」

「なんとまあ、いないのかよ」とダービィフィールドはいった。「それなのにおれは、この教区でもいちばんつまらない男みたいにくる年もくる年も、あちらこちらうろつきまわっていたではないか……トリンガム先生、いったいおれについてのこの話は、どのくれえ前からわかっていたのです？」

牧師は自分の知るかぎり、この事実はいったく忘れられており、全然知られていないといってもいい、と説明した。彼自身の調査は、その前の年の春のある日、ダーバヴァイル家の栄枯盛衰をたどっているころ、荷車に書いてあるダービィフィールドの名に気がついた日に始まったのだが、それから、ダービィフィールドの父親と祖父について調べあげた結果、もう疑問の余地がないところまで来たのだった。

「最初わたしは、こんな役にも立たない知らせで、きみの心をまどわせまいと決心した」と牧師はいった。「しかし時として人間の衝動は、理性の判断よりも強い。それにまた、わたしはきみがこのことについていくらかは、ずっと前から知っているのではないか、とも思っ

た」

「そういえば一度か二度、おれの家族はブラックムーアに来る前のほうが、景気がよかったと聞いたことはほんとうだ。だが、現在は馬が一頭しかないのに、昔は二頭飼っていたくらいのことだろうと思っで、いっこう気にならなかったです。うちには古い銀のさじが一本と、彫りものの印形いんぎようがひとつありますが、さじ一本と印形一つが、いったいなんだろう……ところがこのおれと、あの高貴なダーバヴァイル家の人々が、昔からの同族だったとはねえ。ひいじいさんには秘密があつて、どこから来たのか話しながらなかったということだが……先生、こんなことをうかがってなんですが、現在わたしどもはどこで煙を立てているのですか。つまり、わがダーバヴァイル一門は、どこに住んでいるのです？」

「どこにも住んでいない。郡の一門としては、死に絶えたのだ」

「それはまずい」

「いや、嘘うそでかたまつた家族年代記では、男系の絶滅と書かれているんだが、じつは、下落し、零落した、ということなのだ」

「するとわれわれの一族は、どこに埋まってるの？」

「キングズベリハサブリグリンヒルに。パーベック大理石の天蓋の下に何列も何列も、肖像といっしょにおさまっている」

「一門の莊園と遺産は？」

「何もない」

「え？ 土地もないんですか」

「きみの家族には分家が多かったもので、前にもいったとおり、ふんだんにあったが、今はない。この郡には、キングズベリと、シャートンと、ミルボンドと、ラルステッドと、ウェルブリッジに、ダーバヴァイルの所有地があつたのだが」

「もう一度わがものにすることは？」

「ああ——それはなんともいえない」

「おれとしては、どうしたらいいのだろう？」ダービィフィールドはしばらくしてからきいた。

「何もすることは無い。『ああ勇士たちはついに倒れた』(サムエルの下)と考えて、身持ちを正しくする以外、きみのすることはない。これは地方の歴史家と系図学者には、いくらか興味のある事実だが、それだけの話だ。この郡の小百姓のあいだには、きみの一門とほとんどおなじぐらいかがやかしい家族が、いくつもある。お休み」

「だがトリンガム先生、その話をご縁に、あともどりしていつしよにビールを一杯、どうだね。ビュア・ドロップにはとてもいい生があるだ——ロリヴァのほどよくないことはたしかだが……」

「いや、ダービィフィールド、ありがたいが今晩はやめにしよう。きみはもうじゅうぶんはいっているぜ」こうことばをむすんで牧師は、このふしぎな話をしたことが、思慮分別を欠きはしなかったかと思いつながら、馬を進ませた。

牧師が行ってしまうと、ダービィフィールドは深く考えこんで数歩歩いたが、道ばたの草の土手に腰をおろし、かごを前においた。数分後ひとりの若者の姿が遠くにあらわれ、ダービィフィールドと同じ方向に歩いて来た。若者を見たダービィフィールドは片手を上げた。若者は足をはやめて近よってきた。

「若えの、そのかごをもちな。用たしに行ってもらいたいんだ」

やせた青年は眉をひそめた。「ジョン・ダービィフィールド、このおれに用をいいつけ、若えの」と呼ぶおまえはいったい何様なんだ。おまえはおれの名を知っている。おれがおまえの名まえを知っているように」

「知ってるのか、知ってるのか。こりゃ秘密だ——秘密なんだ。さあ、いうことを聞いて、おれがいつつける伝言を持って行きな……」と

ところでフレッド、秘密というのはほかでもねえ、おれは貴族のひとりなのだ。おれはそれを、本日現在の午後、自分で見つけ出したのだ」この声明をしながらダービィフィールドはすわった姿勢をくずし、土手のひなぎく、の間に長々と横になった。

青年はダービィフィールドの前に立って、頭のとっぺんから足の先までながめた。

「サー・ジョン・ダーバヴィル——それがおれなんだ」と、地に横たわった男はいった。「もし騎士が男爵ならばの話で、ところが、騎士は男爵なんだ。おれについては万事歴史に書いてある。おまえ、キングズベリィサブグリーンヒルってことを知ってるか」

「うん。グリーンヒルの市へ行ったことがある」

「で、その都会の教会の下に、横になっているのが……」

「都会じゃないよ、そこは。すくなくともおれが行ったところには、片目をぱちくりさせてるみたいだ、ちいさな所だった」

「所はどうでもいい。それはおれたちの問題じゃないんだ。そのその教会の教会の下に、おれの先祖が埋まっている。何百人もが、何トンという重さの大きな鉛の棺の中に、鎖帷子に宝石を身につけている。サウス・ウェセックス郡ひろしといえども、おれ以上に、堂々として高貴な骸骨を一門にもっている者はいないのだ」

「へえ？」

「さてそのかごをもって、マールロットへ行き、ビュア・ドロップのはたご屋に來たら、おれを家へつれて行く馬車をすぐよこせといえ。馬車の底に小びんにつめたラムを入れさせ、おれの勘定にしておくんだ。それがすんだらかごをもつておれの家へ行き、女房に洗濯物をかたづけろ、やりあげなくてもいいんだから、話すことがあるから、おれの帰のを待ってろ、というんだ」

若者がうたがわしげなように立っているの、ダービィフィールド

ドは手をポケットに入れ、どちらかといえばわずかしか持っていない一シリング銀貨を一枚取り出した。

「若えの、駄賃だ」

これでもって若者の考えが変わった。

「はい、サー・ジョン。ありがとう。なにかほかにご用は？　サー・ジョン」

「家の者に、晩飯は羊のフライ——買えればだ。買えなければブラック・ポット（血と脂肪でつくつたノ脂せージ）、それもだめなら、そうだ、チタリングズ（豚、子牛などの小腸を煮たもの）、でもいいといつてくれ」

「はい、サー・ジョン」

若者がかごを取り上げ、歩きだそうとすると、村のほうからプラスチック・バンドの音が聞こえてきた。

「ありやなんだ」とダービーフィールドがいった。「まさかおれのためじゃあるまいな？」

「婦人クラブの遠足ですよ。あんたの娘さんも会員じゃありませんか」

「まったく。もっと大きなことにすっかり考えを取られちゃまっていた。さあ、マールロットへ行つて馬車をいっけな。おれもひょっとすると馬車に乗つて、クラブを視察に行くかもしれない」

若者は立ち去り、ダービーフィールドは草とひなぎくの中で夕日を浴びて、横になったままで待った。長い間この道を通る者はひとりもなく、青い丘にかこまれたこの場所では人間は人間の物音といつては、楽隊のかすかな旋律だけだった。

2

マールロットの村は、ブレイクモア、あるいはブラックムーアの美し

い谷の、北東の起伏の間に位し、ロンドンからわずか四時間の旅でありながら、まだ大部分が観光客や風景画家の足に踏まれぬ、山にかこまれて隔離された地帯をなしている。

この谷と知り合いになろうとするには、おそらく夏の日照り時とは別として、取り巻く丘々の頂上からながめるのがいちばんよい。悪天候の時、案内者なしでその奥にはいりこむと、せまくてまがりくねって泥深い道のせいで、とかくいやな思いをする。

野原がけつして茶色にならず、泉がかわいたことのない、このかくれた肥沃な土地の南の境をなすのが、ハンブルドン・ヒル、ブルバロウ、ネットルコーム・タウト、ドッグベリイ、ハイ・ストイ、バップ・ダウンの突起をふくむ、きわだった白堊の屋根である。海岸からくる旅人は、石灰質の丘原と麦畑を二十マイル北へ歩いたあと、急に、このような崖の縁に立つて、それまでに通過した地方とまったく違うものが、地図みたいに下にひろがるのを見て、驚きもするし喜びもある。背後の丘陵はひろびろとして、はてしなく打ち開けた感じを風景にあたえる大きな田畑に太陽が照りつけ、小道は白く、生垣は背が低く枝を折りまげてつくつてあり、空気には色がでない。ここ、谷間では、世界が、より小さくてより繊細な尺度で造られているように思われる。野原はまるで小さな牧場に分かれており、この高みから見おろすと、仕切りの生垣は、草の薄い緑の上にひろがる、濃い緑の糸の網のようだ。目の下の空気はうっとうしく、その青いことといつたら、画家が中景と呼ぶものまで、淡青色を帯びるほどであり、かなたの地平線はこの上なく濃いウルトラマリンである。農耕に適する土地はすくなく制限されている。ほんのわずかな例外を除くと、広くて豊かな草と木のつらなりが、小さな丘と谷を、もっと大きな丘と谷の中に包みこんでいる、というのがこのながめだ。ブラックムーアの谷は、このような所である。

この地域には、地形学上の興味にとらぬ、歴史上の興味がある。この谷は昔、「白い牡鹿の森」と呼ばれた。ヘンリー三世治世のころの、ふしぎな伝説によるもので、トマス・ド・ラ・リンドなる者が、王が追いつめて放してやった美しい白い牡鹿を殺し、重い罰金を申しわたされたという。そのころ、またわりあい最近まで、ここは密林だった。今日でも、昔の状態のなごりは、その斜面にいまだに生き残る古い柏の下ばえと、不規則な林の帯、あるいはその牧場の多くに影をおとす幹のうつろな木々に見いだされる。

森は姿を消したが、その木陰の古い習慣のいくつかは残っている。しかしその多くは、まったく形を変え、あるいは装いを変えて、わずかに生きながらえている。たとえばメーデー（五月一日）のダンスは、さきほどお話しした午後の、クラブの大騒ぎ、すなわちこの地で「クラブの遠足」と呼ばれるものの形をとって、みとめられるのだった。

このお祭りに加わる人々は、真の興味に気がつかずにいたが、マールロットの若い住人たちにとって、これは興味の深いできごとだった。

その特異さは、毎年の記念日に行列をつくって歩き、踊る習慣を維持していることよりも、会員が女に限られる点にあった。男のクラブだと、このような祝賀は、消滅しつつあってもまだではない。しかし女性の生まれつきの内気か、親類の男性の皮肉な態度かが、残っている女のクラブ（ほかにもあるとすれば）の栄光と完全さを、はぎ取ってしまった。マールロットのクラブだけが生き残って、地方的なセレス（穀物、農）の祭礼をつたえていた。それは何百年か、共済クラブとしてではなくとも、一種の願掛けの婦人団体としていまだに続いているのだった。

団体の人々は、全部白いガウンを着ていた。陽気さと五月が同意語だった旧暦の日々（（英国では一七五二年））からの——長い目で物を見る習慣が、人間の感情を単調な平均的状态に零落させる前の日々からの、

はなばなしい遺風なのである。ふたりずつひと組となって、教区をねり歩くのが、彼女たちの姿をあらわす最初だった。緑色の生垣とつる草のはう家の正面を背景に、太陽が彼女らの姿を照らすと、理想と現実との間に、いささか不和があった。総員が白衣を身につけているのに、同じ白色が二つはなかったからである。あるものは純然たる漂白色に近く、あるものには青味がかった白さがあり、また老齢の人々が着ているもの（おそらく何年も、たんでおかれたのだろう）は、死屍のような色あいをして、ジョージ王朝の旧式さながらだった。

白衣の特性に加えて、どの女も、どの娘も、右手には皮をはいだ柳の枝を、左手には白い花の束を持っていた。枝の皮をむくことと、白い花の選択は、めいめいが自分でやるのだった。

少数の中年配と相当の年の女さえも、行列にまじっていたが、時間と労苦になやまされたその銀色の針金みたいな頭髮と、しわのよった顔は、このような快活な場合にあって、ほとんどグロテスクな、たしかに悲壮な光景を呈した。おそらく、ほんとうに観察すれば、「もういっこうにおもしろくない」という年が近づきつつある、心配と経験に富むひとりの婦人について、話を聞き、そして語るべきことが、その若い仲間たちについてよりは、多くあるだろう。しかしここでは年長者をして、その胴着の下で人生が、早く、あたたかく動悸を打っている人々のために、席をゆずらせよう。

事実このむれの大部分は若い娘で、ゆたかな頭髮は日光をあびて、黄金と黒と褐色の、あらゆる色調を反射した。ある者の目は美しく、ある者の鼻は美しく、ある者の口と容姿は美しかったが、そのすべてをそなえた者は、あったとしてもわずかだった。こうしてむざむざと容赦ない人目にさらされるにさいして、唇をととのえる困難、頭をしやんとたもち、顔だからから自意識を取り除く無力さが明白に見られ、彼女らが多数の目に慣れていない純正な田舎の娘であることを示し

た。

娘たち全部は、外側から太陽であたためられるとともに、それぞれ魂が日なたぼっこをする私的な、小さい太陽をもっていた。なにかの夢、なにかの愛情、なにかの趣味、すくなくともなにか漠然として遠くにある希望——希望とはすべてかくのごときものだが、むなく飢えながらも依然生き続けるもの——を持っていた。かくて全部が上機嫌で、多くの者が陽気だった。

行列が「ビューア・ドロップの旅館」にさしかかり、大道から側門をぬけて草地にまがって出ようとするとき、女のひとりがいった——「あら、まあまあ、テス・ダービーフィールド。馬車で家さ帰って行くのは、おまえの父さんじゃないか！」

この叫び声に、隊伍の中の若いひとりが、首をめぐらした。他のだれよりも美しくはないにしても——すばらしい美しい娘で、感じやすい芍薬色の唇と、大きくて無邪気な眼が、色艶と姿にゆたかな表情をそえていた。髪に赤いリボンを結んでいたが、白衣の群れの中でこんなに目立つ装飾を誇りうる、唯一の者だった。見まわすとダービーフィールドが、ビューア・ドロップに属する二輪馬車で、道を近づいて来た。御者はガウンの袖を腋の上までまくり上げた、ちぢれ毛の、屈強な娘であり、この旅館屋の元気のいい召使で、雑用婦の役目にふさわしく、時として馬丁になるのだった。うしろによりかかり、いい気持ちそうに両眼をとじたダービーフィールドは、頭の上で片手をふりまわしながら、ゆっくりした吟唱調で歌っていた——

「おれは——キングズベリに——大きな家族の——地下埋葬所——持っている——そこでは騎士になった——先祖が——鉛の棺にはいつている！」

クラブのものは、テスと呼ばれた娘をのぞいて、くすくす笑った。父親が一同の笑いものになっているので、テスの胸の中では、しだい

にいきどおりが高まっていくらしかった。

「疲れてるんだわ、それだけのことだわ」とテスはいそいでいった、「うちの馬は今日休ませなくてはならないので、だれかに送ってもらっているのよ」

「知らぬが仏なのね、テス」と仲間たちがいった。

「市で一杯やったのよ。ははは！」

「ちょっと。お父さんのことをからかうのなら、もうインチもおまえたちといっしょに歩かないから」とテスは叫び、頬の赤色が顔全体と首にひろがった。一瞬のうちに両眼がしめり、まなざしは地に落ちた。ほんとうに苦痛をあたえたことに気がついた仲間の者は、それ以上にもいわなくなったので、秩序がとりもどされた。テスは、もう一度ふりむいて、父がなにをいおうとしているのか、なにかいいたいことがあるのか、知リたかったが誇りがゆるさなかった。こうして彼女は全員といっしょに、芝生の上での舞踏が行なわれる囲い地へ、動いて行った。そこへ到着するまでには、テスも落ち着きを取りもどし、隣りにいる者を枝でたたいて平常どおりに口をきいた。

人生のこの時におけるテス・ダービーフィールドは、経験に染まず、感情にゆすぶられやすい者だった。村の学校に行きはしたものの、ある程度方言を使用していたが、この方言の音調の特徴は、URという音節を正確に近くいう発声法で、おそらく人間のことばとして、これほど豊かな話しぶりはほかにないだろう、この音節の母体であるところの、とがった深紅の口は、まだその明確な形に落ち着いていず、テスの唇はあることばをいったあとでくつき合うとき、下唇が上唇のまん中を、とかく上に突き上げるのだった。

彼女の顔つきには、まだ幼い時の面影がひそんでいた。この日歩いている彼女には、その元気のいいみごとな成人ぶりのすべてにもかかわらず、時として両頬に十二歳の時の、両眼に九歳の時の彼女が見ら

れ、またときどき口の曲線には、五歳のテスすらがほのめいていた。

しかもこのことを知る者はすくなく、これを考える者はもつとわずかだった。主として他所者であるきわめて少数が、たまたまかたわらを通るときなど、長くテスを見つめ、瞬間彼女の新鮮さに魅了されて、二度とふたび会うことがあるだろうかと思うのだが、ほとんど何人にとっても、彼女はすばらしい絵のような田舎娘であり、そしてそれ以上のものではなかった。

女馬丁が手綱をあつかう凱旋の戦車に乗ったタービフィールドについては、もうなにも見えもせず、聞こえもせず、クラブは所定の地で舞踏を始めた。この仲間には男がいないので、最初娘たちはおたがいどうして踊ったが、一日の仕事が終わる時間が近づくにつれて、村の男たちは、よそから遊びにきたものや通行者などとともに、この場所を取り巻いて集まり、パートナーをさがす交渉を始めたがっているようすだった。

こうした見物人の中に、小さい背囊を肩に、がんじょうな杖を手にした、上層階級の青年が三人いた。どことなく似ていることと、年齢が連続していることから、三人が兄弟であることはだれでも思いついたであろうが、事実そうだった。最年長者は正式副牧師の白いネクタイと、首の近くまであるチョッキを身につけ、縁のせまい帽子をかぶっていた。二番目はあたりまえな大学生だった。三番目の、つまりいばちん若い者の外見は、なにかの特性をしめすにはじゅうぶんでなかった。目つきも服装も、型にはまらず、とらえどころがなく、いまだに職業の溝への入口を見いだしていないことを意味した。予言してもいいのはこの青年が、あること、またはあらゆることを、ただ漫然と、試みに学んでいるもの、ということだった。

三人はゆきずりの知り合いに、聖霊降臨節の休暇を、ブラックムーアの谷をぬける徒歩旅行ですごしているので、道筋は北東のシャスト

ンの町から、南西へ向かうのだと話した。

彼らは大道のかたわらの門によりかかってこの舞踏と白衣の娘たちは何を意味するのかとたずねた。上のふたりは明らかに、ちょっと立ちどまるだけの気でいたが、男のパートナーなしで踊っている娘の一群は、いちばん下の弟をおもしろがらせたとみえて、彼はいそいで立ち去ろうとはしなかった。背囊を肩からはずし、杖といっしょに生垣の土手において、門をあけた。

「エンジェル、きみは何をしようというのだ？」と最年長者がたずねた。

「あすこへ行つて、娘たちと踊りまわろうと思う。どう、皆いっしょに行かないか！ ほんの一分か二分——どうせ長い時間はかからないよ」

「いや、いや、そんなばかなこと！」と長兄がいった。「田舎のおてんば娘と公然と踊るなんて、だれかに見られたらどうするのだ。さあ出かけよう。さもないと、ストアカースルに着くまでに暗くなるし、途中にはとまる場所がない。それにまたぼくらは寝る前に、不可知論反駁の一章を読まなくてはならない、ぼくがわざわざこの本を持って来た以上」

「わかったよ。五分内にきみとカスバートに追いつく。待たないで。約束するから、ねえ、フレックス」

ふたりの兄はししぶながら弟をあにとし、追いつくのに楽なようにその背囊をもつて去った。弟は踊りの場にはいった。

踊りがとぎれるとすぐ、いちばん近くに二、三人の娘に、彼はやさしくいった——「なんでもったいいことなんだろう。パートナーはどこにいるの？」

「まだ仕事がすまないのです」と、もつとも大胆な娘のひとりが答えた。「やがて来ます。それまで、若旦那、あなたパートナーになり

ませんか」

「なりませんとも、でもこんなに多数の中の一つだけひとりでは！」

「ないよりましです。女ばかりで、からみつきもせず抱きあいもせず、顔つき合せて歩きまわるほど、つまらないまねはありません。さあだれなりとお気に入ったのを」

「しーっ、そんなにあつかましくなく！」と、もっと内気な娘がいった。

こう招待された青年は娘たちを見まわし、えり好みをしようとしたが、どの娘たちもみな目新しいので、うまく選ぶことはできなかった。いわばいちばん手近な娘を相手にしたのだが、これは、彼女の予期に反して、最初に話しかけた娘ではなかった。テス・ダービーフィールドでもなかった。血統、先祖の骸骨、歴史的な記録、ダービーフィールドの直系も、いまだに人生の戦いにおけるテスを助けず、最もありきたりの農民階級にぬきんでて、舞踏のパートナーを引きつける役にはたえ立たなかった。ヴィクトリア王朝の金銭の助けのないノルマンの血とは、こんなものである。

他の光彩をうばったこの娘の名は、なんであったにせよ、伝わっていない。しかしこの晩、男性のパートナーという贅沢を味わった最初の者として、みなからうらやましがられた。しかし手本の力とはいたしたもので、闖入者がいないときにはいそいで門をはいろうとしなかった村の若者たちが、今やすばやく集まって来て、まもなく田舎の青年たちがずんずん加わって男女の対は数を増し、クラブでいちばんみっともない女性さえも、もう男の側にまわって踊らないでもいいようになった。

教会の時計が時を打つと、学生は突然、行かなくてはならぬといった。われを忘れていたのだった。——仲間を追いつかねばならぬ。舞踏の群れから出たとき、彼の目はテス・ダービーフィールドの上にと

まった。ほんとうのことをいうと、テスの大きな目には、自分を選んでくれなかったことについての非難が、ほんのかすかだが浮かんでいた。このとき彼のほうも、彼女の内気さのせいで、この娘に気をとめなかったことを、残念に思った。この思いを胸にして、彼は牧場を去った。

ひどくおくれたので、彼は飛ぶような歩き方で小道を西にたどり、まもなく窪地をぬけて次の坂を登った。まだふたりの兄には追いついていなかったが、息をついたため立ち止まり、後ろを向いた。緑の囲い地で娘たちの白い姿が、自分がいっしょにいたときとおなじように、くるくるまわっているのが見えた。娘たちはみな、もうまったく忘れてしまったらしかった。

娘たちみな、だが、おそらく、ただひとりのをのぞいて。この白い姿は、群れを離れてひとり、生垣のかたわらに立っていた。その位置からして彼は、これがいっしょに踊らなかつたきれいな娘であることを知った。つまらぬことといえばそれまでだが、しかし彼は本能的に、自分の見落としたが、彼女の心を傷つけたことを感じた。相手になってくれと頼めばよかったと思った。名まえをきけばよかったと思った。あの娘はほんとうに控え目で、表情ゆたかで、薄い白衣に包まれて、とてもやわらかそうに見えたので、彼は自分のふるまいがおろかだったことを感じた。

だが、どうなることでもない。向きを変え、速足で歩き、彼はこの問題を心中から追い出した。

テス・ダービーフィールドのほうは、それほどやすやすとこのできごとを、考えから追い払わなかった。二度と長く踊る気持ちがおこら